



宮城学院女子大学における「自校史教育」の実践 —— コロナ禍での出発

小羽田誠治

はじめに

宮城学院女子大学（以下「本学」という）においては、2020年度より「自校史教育」が開始された。本稿は、その科目の担当者である筆者が、科目開設に至る経緯、授業内容と方法、成果について報告し、カリキュラムにおける意義や位置づけについて考察するものである。なお、当該授業は、COVID-19の流行に対応する本学の方針のもと、2020年度および2021年度においては遠隔形式で実施し、2022年度以降においては対面形式で実施している。前者と後者では、授業内容と方法において少なからぬ差異があるため、これをひとまとめにして報告することは避け、本稿では前者のみを対象とすることとする。副題として「コロナ禍での出発」と掲げた所以である。

1. 「自校史教育」科目の開設まで

長い歴史を有する本学において、その歴史を体系的に学生に伝えることの必要性はつとに指摘されており、全学教養教育を担当する一般教育部においても、しばしば議論の俎上に上っていた。しかし、担当者やカリキュラムにおける位置づけが定まらないなど、実現に至っていなかった¹。

そんななか、大学において様々な改革が進められるその一環として、全学教養教育の見直しが進められた。本学が以前から守り続けてきた「リベラルアーツ教育」をこれまで以上に充実させ、可視化しようとするものである。こうして、2020年度入学生を対象に行われた学則改定において、本学の一般教育課程では、その部門の1つとして「リベラルアーツ基幹科目」というカテゴリーを新設することとなった。この科目（群）の位置づけについて、『2020年度 学生便覧』では、以下のように説明されている²。

リベラルアーツとは、人間が主体的に生きるために必要とされる知識や手法のことを指し、本学のカリキュラムでは、一般教育科目・専門教育科目を含めてリベラルアーツ教育を重視するものが少なくない。

¹ たとえば、本学人間文化学科教授である大平聡が一般教育科目として「戦時下の宮城学院」をテーマとした講義を行っている例などはあるが、通史としてのものはないようである。

² 『2020年度 学生便覧』（宮城学院女子大学、2020年3月発行）

そのなかにあつて、この「リベラルアーツ基幹科目」には、各学科の専門性に関わらず、より普遍的な意義をもつ講義科目が置かれており、それらを1年次後期から4年次前期にかけて継続的に学修するカリキュラムとなっている。これは、専門教育科目の学修を進めていくなかでも、常に広い視野を持ち続けた人間を育てるという、本学の理念に基づく。

本学の「リベラルアーツ基幹科目」は、学びの意義をより明確化するべく、全科目に通底する「三本の柱」を意識して構成している。即ち、「問う」「生きる」「創る」である。学問はただ学問のためにあるのではなく、学生各人のこうした根源的な行動に何かしらのヒントを与えるものであることを理解されたい。

ここで確認しておきたいのは、2020年度に新しく誕生した「リベラルアーツ基幹科目」において「問う」「生きる」「創る」という「三本の柱」を掲げたことにより、この科目の性質が明らかになるとともに、本学の一般教育部がこれまで実践してきたリベラルアーツ教育の方向性も可視化されたということである。

こうした議論は、自校史教育の推進に向けて追い風となった。なぜなら、それまでの一般教育課程のカテゴリーが「人文社会系科目」や「自然系科目」といった伝統的な分野によるものであったように、リベラルアーツ教育はどちらかと言えば「知識伝達」への志向が強かったのに対し、「リベラルアーツ基幹科目」においては、学習者の主体的な行動を促すことに重心がシフトしたからである。即ち、自校史教育は、「問う」「生きる」「創る」という「三本の柱」を体現するものとして、確固たる位置づけを獲得したと言える。こうして自校史教育は、具体的には2年次科目の「リベラルアーツ基礎D(MG史)」として、全学科に開講されることが決まった。ただし、「リベラルアーツ基礎D」にはいくつかのコースが設定されており、そのなかから1つを自由に選択するという類の科目であつて、全学生対象の必修科目とはなっていない。

さて、2020年度からの新カリキュラムにおいて、「リベラルアーツ基礎D(MG史)」を開講することは決定されたものの、これは2年次科目であるため、当該カリキュラムでの実際の開講は2021年度からである。しかしながら、新カリキュラムの理念や自校史教育の位置づけが定まった2019年度の時点においては、一般教育部内ではむしろ一刻も早い開講を望む気運が高まっていた。そこで、旧カリキュラムのなかで、担当教員の専門性を発揮できる最も自由度の高い科目「特殊研究」(3・4年次科目)において、2020年度から同様の自校史教育を行うことが決定した。

以上のような経緯のもと、2020年度には旧カリキュラムのなかで3・4年次を対象に「特殊研究(宮城学院女子大学の歴史)」が、2021年度には3・4年次を対象に旧カリキュラムの「特殊研究(宮城学院女子大学の歴史)」を継続しつつ、2年次を対象に新カリキュラムの「リベラルアーツ基礎D(MG史)」が、開講された。本稿では、この3回の講義

についての実践報告を行う。

2. 2020年度の実施内容と成果

これまで体系的な自校史教育を行ってこなかった本学には、当然ながらこれを目的に編纂した「教科書」は存在しない。そこで、宮城学院創立100周年の1986年に、河北新報社が『河北新報』において連載した「光あおいで—宮城学院百年」を、当時の学院長である早坂禮吾がまとめた同名の冊子を教科書として使用することとした。また、授業内容に関わるシラバスは以下のとおりである。

授業概要	この授業では、宮城学院の創立から現在までの歩みを振り返る。 歴史とは本来、「お勉強」のための科目としてあるのではなく、人々の生きた営みの結果として紡がれてきたことを見返すことで、人や世の中を理解し、自分を理解するためにある。 皆さんが数年間すごしてきたこの宮城学院の歴史を振り返ることは、まさに自分の立ち位置を見直し、歴史を自分に関係するものとして実感することになるだろう。
到達目標	この授業では、以下の事柄を目指します。 1. 宮城学院が、誰のどのような思いでつくられたかを理解する。 2. 宮城学院が、どのような紆余曲折を経て今に至っているかを理解する。 3. 宮城学院の歴史のなかに自分を位置づけ、自分の道に誇りを持つ。 4. 宮城学院を理解することで、宮城学院のことを少し好きになる。
授業計画	第1回：導入、「ある同窓生」 第2回：「誕生まで」 第3回：写真で見る宮城学院史の概観 第4回：「授業開始」、「ストライキ」 第5回：「第一回卒業生」、「はね駒」 第6回：「女性校長」、「校舎全焼」 第7回：「日本人教師」、「ハンセン・リンゼー」 第8回：「文学会とクリスマス」、「ファウスト校長」 第9回：「試練の時代へ」、「戦時下」 第10回：「仙台空襲」、「再建」 第11回：「文化の殿堂」、「成長」 第12回：「桜ヶ丘へ」、「期にいたりて」 第13回：振り返りとOG職員への質問づくり 第14回：OG職員たちへのインタビュー 第15回：総括

教科書を順に解説していくという、いわゆる従来型の講義形式の授業であるが、工夫した点は以下のとおりである。

- ・歴史学を専門としない学科の学生が多く受講することを想定し、高校までの「暗記科目」イメージを払しょくするべく、成績はレポートによるものとした。
- ・歴史を暗記科目であると同時に「自分とは関係のないもの」と考えがちな受講生に向けて、各自が自らの人生とのつながりに気づけるような趣旨説明を前面に出した。

- ・教科書は創立 100 周年までの内容であるため、その後については OG 職員へのインタビューという形式で補うことを企画した。

このようにして臨んだ初めての自校史の授業であったが、前年度 2 月頃より、暗雲が立ち始め始めていた。言うまでもなく、世界を震撼させた新型コロナウイルス感染症の流行である。

2020 年度が始まって早々、本学も他大学同様、当面の間すべての授業を対面で行わず、遠隔授業を実施することを決定した。そして、その準備のため、5 月の連休明けまでの 1 ヶ月間を休講（夏休み期間に補講）とする措置を取ったのである。まさに出鼻をくじかれた思いであったが、やむなく授業方法を練り直すこととなった。

遠隔授業の具体的な方法は、各教員の裁量に任されていた。そこで、教科書を解説した文章を「講義録」として配布し、これを読ませることとした。受講生には教科書を事前に読んでもらい、さらに授業当日に配布する講義録を読み、意見・感想・質問等を提出させる、というものである。平素より学生の活字離れを心配する筆者としては、これも悪くない機会だと考えたのである。なお、第 3 回に予定していた「写真で見る宮城学院史の概観」については中止とし、以下を繰り返したうえで第 14 回に総復習としてのクイズ大会を行うこととした（遠隔授業に習熟してきたため Zoom にて実施）。

受講者数は 4 月の段階で判明し、36 名であった。内訳は、現代ビジネス学科 4 名、教育学科 5 名、食品栄養学科 8 名、生活文化デザイン学科 5 名、日本文学科 5 名、英文学科 1 名、心理行動科学科 3 名、音楽科 5 名である。想定通り、歴史になじみのない学科の学生が大半であったため、いかに平易な説明で「読ませる」文章にするか、写真などもできるだけ使いながら、また教科書以外の関連する史料を紹介しながら、工夫を凝らして授業資料を作成した（下の写真は第 2 回の授業プリントと関連資料の一部）。



その結果、初回から説明のわかりやすさに対する評価は上々で、また歴史に対する苦手意識が低減したようなコメントも得ることができた。以下にその一部を紹介する。

- ・講義を受けるにあたって、まず最初に自分で新聞記事を一通り読んでみました。当時について知識があまりない私にとっては、記事の内容を理解することが難しく、記事に書かれた文字をそのままに受け止めることで精いっぱいでした。その後、小羽田先生の講義資料を拝見し、解説と記事を見比べながら改めて読み直してみました。すると、当時の状況を具体的にイメージしながら楽しく読むことができました。(食品栄養学科)
- ・私は歴史という科目が苦手です。歴史は暗記科目だと思っており、ただ暗記することが不得意であったのですが、歴史を読み解くためには、人々の生きた営みを知ることが必要だとシラバスに記載があり、この講義を受けてみようと思いました。この講義の中で、大学の歴史を知るとともに、歴史という科目に対する意識を変えてみようと思っています。今回の記事を読んで、非常に物の歴史を感じました。学校へ通う手段は鉄道馬車、入学試験は筆で書くなど、今では考えられないことばかりで驚きでした。歴史に対する見方も変わり、また学校の校歌とこのテキストの行重(ママ)に関連があり、そこもまた面白いと感じました。(食品栄養学科)

特に、第2回は宮城学院(当時は宮城女学校)創設がテーマであり、押川方義やプールポーらの様々な人物が協力し合うドラマチックな内容を、教科書では1,000字程度に要約された内容を10,000字以上の資料で解説するという濃密な回は、多くの学生にとって印象深いものであったと手ごたえを感じている。

- ・今回の教科書1ページに、運命的な出会い・愛する人との別れ・奇跡のタイミング…といった熱いドラマがあったなんて、授業の前にサラッと読んだだけではわかりませんがありません。だからこそ、この授業の面白さがよくわかるし、価値を感じます。「宮城学院の歴史」と限定されている学びのようで、東北学院の歴史や開国後の外国人宣教師たちの国内での動き、当時の社会の様子などなど…想像以上に幅広く歴史を学べているのを実感しました。知れば知るほど、深く・広くなっていった歴史にはキリがないなあ、とも思いました。(教育学科)
- ・今回の授業内容は濃く、多くの人物が出てきました。女性宣教師プールポーさん、オールトさん、グリーンさん、モーアさん夫妻モーア(ママ)ホーイさん、押川方義さんパームさん、吉田さん松平正直さん、宣教師バラさんらが本学、東北学院設立に深く関わったことを知りました。吉田亀太郎さんによって、初めて東北が脚光を浴びることとなったし、バラさんとの出会いで「合衆国改革派」宣教師との意気投合を図ることができ、奇跡的な出会いの積み重ね、つながりがあったということに驚きました。誰かが少しでも欠けていたら、宮城学院設立まで至らなかったのではないかと深く考えさせられました。(音楽科)

その後も順調に遠隔授業を続け、オンデマンド形式だったこともあり、課題提出率(=出席率)は平均約97%と高かった。内容的にも、「校舎全焼」や「戦時下」など苦難に

あったときには、コロナ禍にある自身の境遇と重ね合わせるなどして、深く理解しようとする姿勢を伺わせるコメントも多かった。この点においては、災い転じて福となしたと言うことができよう。

当初予定していたOG職員へのインタビューは、すでに8月に入り、遠隔授業にも慣れた頃でもあったため、Zoomを使用したリアルタイム形式で行った。教科書が100周年当時の内容であったため、そこから現在までを埋めるという目的のもと、世代の異なる3人の職員に登壇していただいた。太田富美子さん（1981～1982年短大教養科在籍、1982年に入職）、桑名佑桂さん（1991～2001年中高および大学人間文化学科在籍、2005年に入職）、高橋里穂さん（2012～2016年大学生活文化デザイン学科在籍、2016年に入職、2021年に退職）である。事前に質問を提出してもらい、教員が司会として3人の職員にインタビューを行うというスタイルで進化したため、学生の発言の機会はほとんどなかったが、それでも貴重な話を聞くことができたという感想を多く得た。

- ・OG職員さんの質問の回答を聞き、私は学生しか経験した事がないので学校も企業の一つだと改めて実感しました。ベテランの職員さんから聞く学校の話は、昔と今の学校の違いを知る事ができて面白かったです。印象に残っている授業や学校では何をしていたかなど宮城学院の中での思い出がずっと残っているOGさんの話を聞いて授業も友人関係ももっと大切にしていきたいと思いました。（現代ビジネス学科）
- ・今回OGさんのお話を聞いて、やはり宮城学院は良い所だなと感じました。特に、先生方は学生と真剣に向き合い一つ一つ丁寧に指導してくださる所は今も変わらない良い所だと思いました。また、先生方だけではなく、学生同士の支え合いや自主的に行動することを身につけられたというお話を聞き、宮城学院での学びが働くことにきちんと活かされていることが分かりました。さらに、宮城学院は多くの職員の支援により成り立っていることが分かりました。今回のお話を聞いて、就職活動や仕事を行う際に活かせるよう、今までの学生生活を振り返り、自分の力にできるようアウトプットを頑張りたいと感じました。（心理行動科学科）

この授業の最後には、全体を通しての感想を提出してもらった。紙幅の都合上、すべてを紹介することはできないが、自らが通う学校の歴史を知ることの意義を感じ、今後の学生生活にとってプラスになるという旨のコメントが多かった。

- ・私はこの授業を選択しましたが、本学は他の大学に比べて比較的新しい校舎であり歴史ある大学だとは思っていませんでした。また、本学がキリスト教であることもあまり疑問視せずに4年間を過ごしてきました。きっとこの授業を選択しなければ本学は誰が創立したのかも、何があったのかも知らないまま卒業していたと思います。授業を通して、大学の創立者は1人ではなく、たくさんの人の努力によって作り上げられたものだと分かりました。時代背景には医療があまり進んでおらず、家族を病気で亡くしてしまう方が多かったり、戦争を経験したりと様々な困難があったにも関わら

ず、一生懸命に大学を立て直そうとした人たちが関わっている本学に入学できたことを誇りに思います。本学のことを知れば知るほど、学校に行きたくなりました。SNSで大学の友達にこの授業の話をする、いろいろな歴史があったことに驚かれるので楽しくてよく話していました。また、初めての遠隔での授業だったので不安もありましたが、資料の先生の説明の仕方が分かりやすかったのと、時々クスッと笑えるような話し方だったので楽しんで授業を受けられました。(教育学科)

- ・ 講義を通して、様々な人の努力や苦勞、多くの人達との関わりによって今の宮城学院があるのだということを学ぶことができました。この授業を受けていなかったら、宮城学院の歴史に関してあまり注目することのないまま卒業していたのではないかと考えると、受けて良かったと感じます。宮城学院の歴史を知れたことによって、講義を受ける前よりも、宮城学院のことを好きになりました。毎回の講義録は、教科書のより詳しいエピソードや関連資料があり、さらに深く知ることができて興味深く読ませていただきました。最後のクイズでは、今までの講義の復習も兼ねて、自分はどのぐらい覚えているのか確認することができて、クイズも楽しむことができました。(心理行動科学科)

以上、私自身が直接に学生とやり取りをするなかで得たコメント等を紹介してきたが、最後にFD推進委員会が実施している授業評価アンケートの結果にも触れておきたい。回答者は36名中17名で、回答率は47.2%と高くはないが、結果は以下のとおりである。

番号	設問	科目評定 平均値	全体平均 評定値	科目評定 偏差値
1	この授業の内容を理解できた。	4.35	4.11	55.62
2	考え方、能力、知識、技術が向上した。	4.29	4.12	54.80
3	自ら学ぶ意欲が湧いた。	4.35	3.97	59.54
4	自ら進んで課題を発見し、探究する力が身に付いた。	4.12	3.87	57.13
5	教え方(教授法)はわかりやすかった。	4.65	4.01	61.51
6	授業中で配信された配布物、提示資料などは読みやすかった。	4.47	4.16	56.38
7	この遠隔授業の進め方に満足している。	4.35	3.90	58.59
9	遠隔授業に使用したツールに満足している。	4.41	3.94	60.44
10	この授業は、対面授業を代替できたと思う。	4.24	3.67	61.54

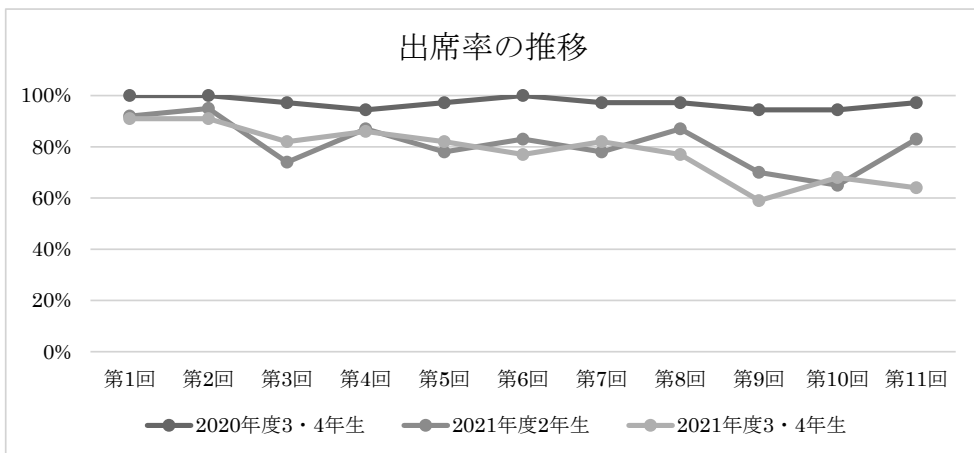
設問8は使用した遠隔ツールに関する設問であるため割愛するが、すべての設問において高い評価を得ていることがわかる。文字を中心とした授業資料は、学生にとって決して苦にならなかったどころか、むしろ良い学びになっていたことが、定量的にも確認できたとと言える。

3. 2021 年度の実施内容と成果

この科目は前期科目であるため、2021 年度もまた遠隔での実施となった。前年度に高い評価を得ていたこともあり、実施形態は踏襲し、シラバスおよび講義内容も基本的には変更せず、一部をアップデートするにとどめた。2020 年度と大きく異なる点は、「1. 「自校史教育」科目の開設まで」で述べた通り、2 年次対象の新カリキュラム「リベラルアーツ基礎 D (MG 史)」が開講されたことである。即ち、対象学年の異なる 2 つの授業を同一内容で実施した年度である。本節では、前年度との比較とともに、この開講学年による差異についての分析も行っていきたい。

まず、受講生数は、2 年生が 22 名であった。内訳は、現代ビジネス学科 3 名、食品栄養学科 7 名、生活文化デザイン学科 1 名、日本文学科 2 名、英文学科 3 名、心理行動科学科 4 名、音楽科 2 名である。一方、3 年生は 21 名であった。内訳は、現代ビジネス学科 7 名、教育学科 2 名、食品栄養学科 3 名、生活文化デザイン学科 2 名、日本文学科 7 名である。偶然にもほぼ同数だったが、学科構成は大きく異なっている。とはいえ、2020 年度と併せて考えてみても、特に何か傾向がつかめるわけではない。

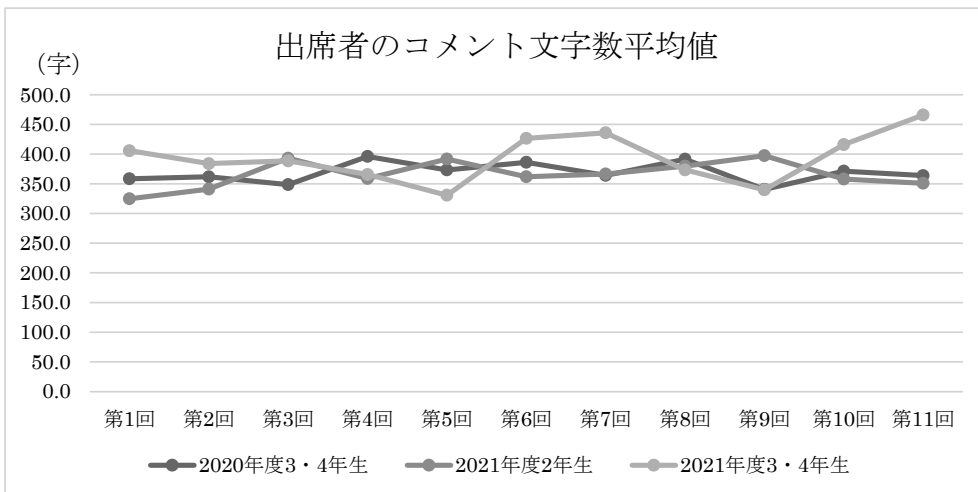
学期全体を通しての課題提出率 (=出席率) は、2020 年度に比して低かった。教科書の解説を行った第 1 回から第 11 回までの平均は、2 年生が 81%、3・4 年生が 78%となっている。以下、その推移を示したグラフを掲載する。



初回の出席率が最も高く、その後少しずつ減少していくこと、それが高学年においてより見られることは、おそらく私の授業に限ったことではないが、そのような授業進行度や学年による違いはむしろ誤差の範囲と言えるほどに、2020 年度と 2021 年度の差異は顕著である。もし、この年度による差異も私の授業に限ったことではないのであれば、それは、コロナ禍に対する「慣れ」あるいはコロナ禍の緩和による「行動範囲の拡大」などが要因と考えられる。一方、私の授業に特有の現象であったならば、前年度のマイナーチェンジに過ぎない授業資料が、学生にとって臨場感を欠く (=手抜き) 印象を与えた可能性が考

えられる。これはどのように考えたものだろうか。

前者については、私の授業のみでは検証不可能である。後者については、「出席者のコメントの充実度」から考えてみたい。というのは、毎回課題として提出を求めたコメントについて、こちらから「〇字以上」といった指示はしておらず、であれば、学生の授業に対する印象の深さにある程度比例するのではないかと考えられるからである。そのグラフを以下に示す。



一瞥してわかる通り、ここには出席率ほどの差異は見られないどころか、いずれもおおよそ 350 字強の前後に収まっていると言える。よって、少なくとも課題を提出した学生にとっては、年度（や学年）による興味関心あるいは理解度の差は特になかったのではないだろうか。よって、2020 年度から 2021 年度にかけての出席率の低下は、私個人の要因というよりは外的環境の変化によるものと推測されるが、であれば、ここでこれ以上の考察は控えたい。

なお、この 3 クラスに共通して言えることとして、第 9・10 回の出席率が低かったことが挙げられる。これは「光あおいで」のテーマで言えば「仙台空襲」、「再建」、「文化の殿堂」、「成長」の回であり、私としては終戦から大学創設へと至る「見せ場」とも言える部分だと認識していたのだが、学生の関心はそうではなかったようだ。授業コメントから察するに、第 8 回の戦時下への突入といういわゆる「鬱展開」が苦手な学生もいたようであるし、それと「飽き」の時期とが重なったのかもしれない。今後さらなる工夫が求められる箇所だと認識しておくべきであろう。

本節においても、最後に FD 推進委員会が実施している授業評価アンケートの結果に触れておく。回答者は両クラスとも 6 名しかなく、回答率は 30% にも満たないので、決して質の高いデータとは言えないのだが、結果は以下のとおりである。

番号	設問	科目評定 平均値 2年生	科目評定 平均値 3・4年生
1	この授業を意欲的に受講できた。	4.50	5.00
2	内容を理解できた。	4.17	4.83
3	考え方、能力、知識、技術などが向上した。	4.33	4.83
4	自ら学ぶ意欲が湧いた。	4.00	5.00
5	自ら進んで課題を発見し、探究する力が身についた。	3.83	4.50
6	教え方（教授法）はわかりやすかった。	4.00	4.83
7	配布物、掲示資料などは読みやすかった。	4.17	4.83
8	総合的に判断すると、この授業は良い授業だった。	4.50	5.00
12	遠隔授業に使用したツールに満足している。	4.67	4.33
13	この授業スタイルは、対面授業を代替できていたと思う。	4.33	4.33

2020年度とは設問も回答率も変わっており、単純に比較することはできないのだが、2021年度も概ね高い評価を得ることができたと言えよう。とはいえ、興味深い事実が目を見く。同一年度内で回答率もほぼ同じ2つクラスについて比較すると、ほぼすべての設問において、3・4年生の評定が2年生のそれを上回ったということである。即ち、出席率も各回のコメント文字数も大きな差はなかったにもかかわらず、授業評価が異なっているのである。もしこれがサンプルの偶然の偏りに起因するものではないのであれば、何を示しているのだろうか。

考えらえるのは、本学に対してすでになじみのある3・4年生とそうではない2年生との違い、であろう。特に2年生は2020年度に入学したのであるから、入学当初よりコロナ禍にあり、キャンパスに足を踏み入れたことすらほとんどない学生たちである。彼女らにとって、授業の内容を情報として理解することはできたとしても、これまでの学生生活を振り返って歴史と関連させたり、逆に歴史から自らの将来の展望を見出したりすることは、決して容易ではないと想像されるのである。

このことは、この授業の今後を考えるうえで重要な手掛かりを示しているように思われる。つまり、何年生を対象に開講するべきか、ということである。おそらく、学年が上がれば上がるほど、この授業に対する理解度は深まるはずである。そういう意味では、少なくとも初年次教育に位置づけるのは、私個人としては抵抗がある。授業で語る多くのことが、各自の学生生活と関連させて消化されることなく終わってしまうのは、非常に勿体ないことである。

しかしながら、学年が遅ければ遅いなりに別の問題がある。冒頭に述べたリベラルアーツの趣旨とは別に、本学について知ることがこの授業の目的の1つであるならば、やはり

その知識を生かす時間を与える必要があるからである。事実、本講義を終えた時点で、2年生は学生生活の3分の1を終えたあたりなのに対して、3年生は半ばを過ぎ、4年生に至っては残すところあとわずか、という時期に差し掛かっており、受講した学生のなかには「もっと早く知っておきたかった」という声も少なくなく、それが3・4年生に多かったことは想像に難くない。

これらを総合するに、授業内容に対する満足度は3・4年生の方が高くなることが予想されるものの、授業そのものに対する姿勢や理解度は2年生とて劣るものではないため、本学における今後の学生生活への姿勢という、この授業以外にも波及する教育効果を求めるのであれば、新カリキュラムとしての「リベラルアーツ基礎 D (MG 史)」の開講時期は妥当なもの判断される。

おわりに

以上、本稿では、本学で2020年度より新たに開始した自校史教育について、その理念的な位置づけや開設の経緯から説き起こし、授業実践の説明と成果について述べたうえで、そこから得られたいくつかの展望を示した。

2020年度からのコロナ禍における対応は、大学にとっても私自身にとっても小さくない試練であったが、教育本来の目的を見失わずに対応し、学生の反応も見る限り、学生にとって良い学びを提供できたものと自負している。とはいえ、選択科目という性質もあって履修者は決して多いとは言えず、より多くの学生に本学の歴史を知ってもらうためにも、この授業の魅力をさらに高めていかななくてはならない。また、対面授業というスタイルに戻った2022年度以降は、授業資料を作り変えることはもちろん、講義の進め方においても新たな展開が求められている。こうしたコロナ禍明けの実践と成果については、稿を改めて報告したい。

(こはだ せいじ / 宮城学院女子大学一般教育部教授)